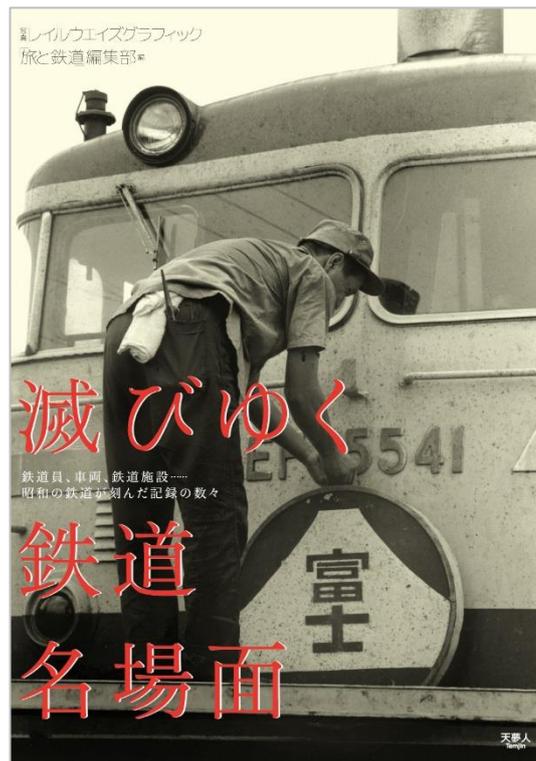


各 位

2022年3月14日
株式会社天夢人

国鉄に密着して撮影した貴重な写真で振り返る昭和の鉄道シーン
たくましく、そしておおらかだった懐かしい時代を記録した
『滅びゆく鉄道名場面』を発売

インプレスグループで鉄道・旅・歴史メディア事業を展開する株式会社天夢人(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:勝峰富雄)は、2022年3月16日に、『滅びゆく鉄道名場面』を刊行いたします。



トレンマークの交換や、第一種踏切を上げ下げする保安係、駅構内にあった吊り下げ式の発車案内板、サボ収納室、「パタパタ」式発車案内装置、硬券ホルダーなど、かつては当たり前であった鉄道の名場面を、鉄道に特化したフォトライブラリー「レイルウェイズグラフィック」所有の写真で振り返る一冊。特に、往時の鉄道員たちが働く姿は、荒川好夫さんをはじめとして国鉄に密着して撮影を行ってきたからこそ見られた、とても貴重な必見モノのシーンが記録されています。当時の鉄道事情や、システムなどの解説をつけて、懐かしく鉄道文化を振り返ることができます。

躍動する鉄道員の姿や、昭和の懐かしい国鉄シーンが満載です。



1章 | 飛びゆく鉄道名乗車の数々

信越本線新潟駅での特急「北越」でのトレインマーク交換作業。後方のトキには同線区の黒いトキのイラストが描かれている車体の側面。

ボンネット型特急は手作業で着脱

1958年に特急「こだま」でデビューした20系(のち15系)以降、ボンネット型の先頭部には造られた特急列車のレンジャーには各列車の変種を記したアクリル板を取り付けられ、折り返し駅や基地では職員などの手による着脱作業が行われた。車体内部には蛍光灯が設置されていて、マークは「付灯式」で輝いた。当初は文字のみだったが、1978年10月ダイヤ改正で回転式のものも増え、手動で少スト入りアクリルのマークが脱着されている。ボンネット型の特急列車は2010年の489系改行特急「瑞穂」を最後に定期運行から離脱し、トレインマークの着脱作業も見られなくなった。

トレインマークの交換

道床整備の保線区員

作業歌に合わせてビーターなふるう

現在では道具に代わったバラスト(砂利)の積みや修正する突き固の作業の大半は、マルチタスクマシンなどの機械を使って行われることがほとんどだが、かつてはすべて保線区員の手作業によってなされていた。保線区員はビーターと呼ばれるはしに似た工具をせりあげ振り、「道床築き固め作業」という作業歌に合わせてタイミングを計り、そろって振り下すという作業を繰り返す。次かすことのできない作業だが、かつて「築路工法」と呼ばれた作業用にとって過酷なものだった。理由は、アメリカの大規模測量建設に使われたアイラング不系鋼固定式が、そのつらさをはじめた特徴だったという。

信越本線新子駅構内で走っているビーターを今も少人数で使っている。タタタタの導入以降、すべては手作業で行われた。1971年7月5日撮影。



2章 | 鉄道員たちの証



食堂車の 供食スタッフ

青函連絡船にも船内食堂
現在は完全予約制が主流

日本で初めての食堂車が運行されたのは1899年、私鉄の山陽鉄道(現・山陽本線)京都～三田段(現・防府)間列車の1等車合造車だった。1901年には国営鉄道(国鉄)も新橋～神戸間の急行で載いた。1960年代以降の国鉄特急には必ずといっていいほど連結されていた食堂車だったが、乗務員の人員削減や新幹線の発達に伴う長距離列車の減少で、次第に数を減らしていった。長く続いた予約なしで飲食可能な「ストライム」の食堂車は、2000年の東海道・山陽新幹線の「アランドゥかり」が最後となった。現在は飲食そのものを売って完全予約制の「レストラン列車」が、国鉄とも主流となったが、気軽に食事や酒類が楽しめる往時の食堂車を懐かしむ声も多い。青函連絡船のすべての貨客船にも船内食堂があった。

東京駅発青函線青森のブルートレイン「あずさ」の食堂車内で、ホームに広がる雪景色を眺める乗客の姿(2017年1月17日撮影/山崎)



炭水車の石炭ならし

途中停車駅などで機関士の必須作業

炭水車の石炭は機関区や途中駅での「積み替え」には欠かせない。炭車の急な積り増しや出回りに伴って積りが付いているが、後半は氷半、そのため積り増しを程度減らす。後半から出回りが遠くまで手作業で移してやらなければならない。この作業を「石炭ならし」といい、機関士の途中停車駅

などでの必須業務とされた。ただし優等列車など停車時間の短い途中駅では、積り増しや積り増しを程度減らす。後半から出回りが遠くまで手作業で移してやらなければならない。この作業を「石炭ならし」といい、機関士の途中停車駅

国鉄本線昭和駅で、急行「あずさ」を牽引するD52形15号の炭水車の上で、石炭をならす作業員。1971年1月22日撮影/山崎



国鉄時代の蒸気機関車やブルートレインなどで、今はなくなってしまった業務に就く鉄道員たちが働く姿を収録。とてもたくましかった時代の鉄道の記憶が刻まれています。

【目次】

1 章 滅びゆく鉄道名場面の数々

腕木式信号機

ヘッドマーク

トレインマークの交換

昼夜兼用特急電車

ブルートレイン

エル特急

ボンネット型気動車特急

スキー列車シュプール号

御召列車

補機増解結

夜行快速

ナローゲージ列車

れんが造り機関庫

開放式寝台

2 章 鉄道員たちの姿

御召列車牽引機の装飾

SL の機関区内誘導

電気機関車の誘導

パンタグラフの上昇

ブルートレインの乗務員交代

ヘッドマークの交換

583 系寝台→座席の転換

車両を洗う

突放する操車係

道床整備の保線区員

ポイントの保守

指差喚呼で安全確認

第一種踏切の保安係

雪の中の線路点検

軌道自転車で線路を走る

関門トンネルの線路清掃

関門トンネルのキロポスト清掃

青函連絡船の機関室

駅構内の線路の清掃
大手私鉄で貨車を押す

3章 記憶に残したい車内や駅の光景

満席の食堂車
ボックス席の栓抜きと灰皿
鉄道公安官の巡回警ら
普通車自由席で眠る乗客
簡易荷物車
転てつ器小屋
駅の伝言板
硬券ホルダー
改札口の入鋏シーン
待合室のダルマストーブ
吊り下げ式の発車案内板
サボ収納室
ディスカバー・ジャパン
「パタパタ」式発車案内装置
「発駅着席券」売り場
鉄道弘済会のワゴン販売
テント下で並ぶ帰省客
手小荷物扱い所
赤帽
修学旅行専用列車
新聞輸送列車
「かつぎ屋さん」が行き交うホーム
ホームの立ち売り
ポリ茶瓶
推進運転の客車列車
尻押し部隊
タブレット交換
通票閉塞器の取り扱い
郵政省所有のターレット
列車内の郵便局
車内販売員
食堂車の供食スタッフ
食堂車の調理スタッフ

車掌専用「ハチクマライス」
国鉄バスのバスガール
つばめガール

4章 思い出の列車たち

貨客混合列車
沼尻鉄道の貨客混合列車
ウマヅラ電車
2軸客車
SL牽引急行
夜行普通列車
大垣夜行
運炭列車
ボンネット型電車
展望車
青函連絡船／青森駅
宇高連絡船
宇高航路のホーバークラフト便

5章 蒸気機関車の時代

扇形車庫
転車台
給炭ホッパ
操重車
炭水車の石炭ならし
給水塔
砂の補充
蒸気機関車の整備点検
蒸気機関車の三重連
機関士と機関助士

写真協力

レイルウェイズグラフィック

鉄道写真に特化したフォトライブラリー。旧国鉄本社広報部の専属カメラマンとして国鉄が民営化した直後まで広報・宣伝用写真撮影に従事した、代表の荒川好夫氏が撮影し続けてきた写真を中心に、昭和から現代に至るまでの豊富な鉄道写真をストックする。特に国鉄時代の写真の数々は、今となっては見ることのできない貴重なものが多く、記録資料としての価値も高い

作品を数多く未来へ伝える。

<http://rgg-photo.net/>

【書誌情報】

書名:『滅びゆく鉄道名場面』

仕様:B5判・192ページ

定価:2530円(税込)

発売日:2022年3月16日

全国書店、オンライン書店のAmazonなどで発売中。

<https://amzn.to/3nnrWPN>

【株式会社天夢人】 <https://temjin-g.com/>

2007年設立。隔月刊雑誌『旅と鉄道(奇数月21日発売)』をはじめとする、鉄道・旅・歴史・民俗・カルチャーをテーマとした雑誌や書籍を発行し、人生を豊かにするための情報を発信しています。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社:東京都千代田区、代表取締役:松本大輔、証券コード:東証1部9479)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社天夢人 担当:真柄

Tel:03-6413-8755(2022年4月1日よりTel:03-6837-4680)/E-mail: info@temjin-g.co.jp

URL:<https://temjin-g.com/>